

先週私たちは、救いの保証である聖霊が、異邦人にも、つまり、コルネリオとその家族、また彼の親しい友人たちにも注がれたことを見ました。ここから異邦人宣教が始まるわけですが、ただ現実としては、このことはコルネリオの家で起こった出来事ですから、当然、その場にいなかった人々は、神様がどのようにしてペテロやコルネリオに働きかけられたかは知らないわけです。ですから、この知らせを聞いた時、使徒たちやユダヤの兄弟たちの間では、ペテロに対する非難が起きました。

1-3節「さて、使徒たちやユダヤにいる兄弟たちは、異邦人たちも神のみことばを受け入れた、ということを目にした。2 そこで、ペテロがエルサレムに上ったとき、割礼を受けた者たちは、彼を非難して、3 『あなたは割礼のない人々のところに行って、彼らといっしょに食事をした』と言った」。

「異邦人たちも神のことばを受け入れた」という知らせは、本来、それ自体は喜ばしいはずのものでありますが、そうさせないものが、ユダヤ人クリスチャンたちのうちに、特に割礼を重んじる者たちの中にはありました。それは彼らをして、「自分たちは割礼を受けた者であって、割礼のない異邦人とは違う」、「自分たちは神の選びの民であり、彼らは神を知らない汚れた罪人」といった偏見が、自分たちと異邦人たちとを隔てる大きな壁として彼らのうちに存在していたからです。

ですから、本来、交わりをもたないはずの異邦人たちが神のことばを受け入れたということは、決して超えてはいけないその一線をペテロが越えたと彼らは理解しました。当然、それは非難されることと彼らは考えたのです。ですから、彼らのペテロに対する非難のことばは、「なぜ彼らにみことばを語ったのか」とか、「なぜ彼らにも聖霊が下るように導いたのか」というものではありません。「みことば」とか「聖霊」、それ以前の問題として、「なぜ彼らのところに行き、いっしょに食事をしたのか」というものだったのです。

では、なぜ彼らは、ペテロが異邦人たちのところに行ったことだけでなく、彼らといっしょに食事をしたことにも言及しているのでしょうか？それは、ユダヤ人たちの食べない汚れたものやきよくない物を食べる異邦人たちと食事をするので、ペテロ自身も汚れた者となったと考えたからです。そのようにしてユダヤ人としての伝統や慣習をやぶった、と彼らはペテロを非難しました。

自分が率先することによってではなく、主によって命じられるままに従ったペテロとしては、当然、ここで事の次第を説明しなければならぬ状況となるわけです。そして、その説明は、5節以降に記されていますが、私たちはすでにその流れを知っていますので、今日は詳細については見ません。ただ、これまでのところに記されていないこともペテロはここで語っていますので、それらを見たいと思います。

14節「その人があなたとあなたの家にいるすべての人を救うことばを話してくれます」と言ったというのです。コルネリオが最初、御使いから語られた時には、この部分は出てきません。コルネリオに遣わされた部下たちが、ペテロを訪ねた時も、彼らは「あなたからお話を聞くように」(10:22)と言うだけで、どんな話についてかは説明していません。また、ペテロがコルネリオを訪ねた際のコルネリオの説明は、「主があなたにお命じになったすべてのことを伺おうとして、みな神の御前に出ております」(10:33)というものでした。

ですから、この14節のことばは、ペテロがコルネリオの願いに応じて、数日間、彼の家で滞在した時に、コルネリオから聞いたのか、それとも、すでに聞いてはいたけど、この手紙の著者ルカが、あえてこれまで記さなかったのか、本当のところはわかりません。でも確かなことは、ペテロ自身が、このように言うわけですから、どこかの時点でコルネリオから直接そう聞いたのでしょう。

そう考えると、どうですか？コルネリオが、ペテロから話を伺うために、自分の家族や親しい友人たちをみな集めていたのもうなずけると思います。彼が、ペテロを前にして、「私たちはみな神の御前に出ています」と言ったのも納得がいくのではないのでしょうか。なぜなら、主はコルネリオに、彼と彼の家のすべての者を救うことばをペテロが話してくれるとおっしゃっていたからです。

Ⅱテモ 3:15 「…聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです」。いかがですか？今日あなたは、聖書があなたを救いに導く神のことばであると信じ、それに聴き入っていますか？ペテロの語ることばのすべてを受け入れようとして、コルネリオたちが耳を傾けたように、あなたは聖書を通して語っておられる主のことばに耳を傾けておられるでしょうか？

もう一つは、15-16 節「そこで私が話し始めていると、聖霊が、あの最初のとき私たちにお下りになったと同じように、彼らの上にもお下りになったのです。16 私はそのとき、主が、『ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは、聖霊によってバプテスマを授けられる』と言われたみことばを思い起こしました」。

コルネリオたちに聖霊が下るのを見たペテロは、その時、主の言われたこのみことば（使徒 1:5）を思い起こした、といます。バプテスマとは、「水に浸す」という意味ですから、「聖霊によってバプテスマを授けられる」とは、聖霊によって浸される、つまり、聖霊に満たされるということです。以前、私たちはサマリヤ人の町での魔術師シモンの出来事を見ました。彼は、町の人々とともに主を信じてバプテスマを受けたわけですが、彼のうちには救われる前の「力を持ちたい、人々の関心を集めたい」という古い性質が残っていたため、彼は聖霊の権威をお金で買おうとします。そして、ペテロから滅びの宣告を受けるのです。

皆さん、聖霊によるバプテスマは、人が与えることのできるものですか？シモンを戒めたペテロは、異邦人たちにも聖霊が下るのを見た時、それを自分が行ったことのように考えていたのでしょうか？続く 17 節、「こういうわけですから、私たちが主イエス・キリストを信じたとき、神が私たちに下さったのと同じ賜物を、彼らにもお授けになったのなら、どうして私などが神のなさを妨げることができませんか？」

ペテロは、自分たちが主イエスを信じた時に受けたのと同じ賜物を、異邦人たちにも授けたのは、誰だと言っていますか？彼自身が授けたと言っていますか？それは神様です。聖霊によるバプテスマ、つまり、聖霊を与え、聖霊によって満たすことは、神様にしかできません。それは神様のなされるわざであり、それを誰か人が妨げることなどできないのです。神様は、確かにサマリヤ人や異邦人たちが聖霊を受けるにあたり、ペテロを用いられました。でもペテロは、それを自分がしたこととしてではなく、神様のなされたことと言うのです。

私は、ここに主がペテロという人を選び、また使徒たちのリーダー的存在として立て、彼を通してご自身の栄光を現わされた理由を見ます。ペテロは、自分がただの人間に過ぎないことをしっかりと理解していました。それゆえに、主が自分を通して行われていることは、主が行われていることと理解していたのです。そのことは極めて当然のことのように思えるかもしれません。でも、決してそうではないと思うのです。

どうぞ考えて見て下さい。ペテロは、彼自身が聖霊を受け、大胆にみことばを語ることで多くの人が悔い改めに導かれ、一度に三千人の人がバプテスマを受けました。また、彼はさまざまなきわざも行ったわけですが、最近の箇所では、ルダでアイネヤをいやし、ヨッパではタビタをよみがえらせたのです。また何よりも、彼が祈って手を置くと、人々に聖霊が下りました。もしそれがあなたなら、どうですか？もし私がペテロなら、間違いなく調子になっていたことでしょう。自分を何かすごい人かのように勘違いしていたと思うのです。

でも、ペテロは言います。「どうして私などが神のなさを妨げることができませんか？」と。ペテロでさえ、こう言うのですから、他に誰が神様のなさを妨げることができませんか？あなたはできますか？誰もいないのです。ところが、ここで神様のなされていることを「救いのわざ」と捉えるなら、どうでしょう？ペテロは、割礼のあるユダヤ人クリスチャンたちに、異邦人たちの救いについて、神様がそれを望まれ、彼らにも聖霊を下らされたのなら、どうして私なんか神様のなさを妨げることができませんか？というわけですが、神様の救いを妨げるものは、本当に何もありませんか？誰もそれを妨げることができませんか？

18 節「人々はこれを聞いて沈黙し、『それでは、神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ』と言って、神をほめたたえた」。ペテロの説明を聞いた彼らは、沈黙の後、神様をほめたたえます。それは、異邦人たちをして、彼らが主のみことばを受け入れたことが、ペテロではなく、神様のなされたことだと人々が信じたからです。彼らは、自分たちの考え、これまでの偏見に固執するのではなく、神様のなされていることに心を開き、信じることを選びました。確かに彼らも聖霊を受けていた証拠と言えるでしょう。

では、どうですか？神様が、いのちに至る悔い改めを異邦人にも与えられたこと、つまり、異邦人たちも信仰によって救われる、というメッセージを、すべてのユダヤ主義者たちが受け入れたのでしょうか？ガラテヤ書などを見ると、決してそうではないことがわかります。つまり、救いが信仰によるのではなく、人のわざによると考えた人たちは、それを神様のなされることとは受け入れなかったのです。彼らは、割礼を受け、律法を守る生き方をするので、まずユダヤ人となることで救われると主張しました。そのようにして自分たちの考え、偏見を優先することで、神様の御心、神様のなされていることを否定したのです。

神様はこの天地万物を造られたお方です。主は全知全能のお方です。それゆえに、主がなされることを本当の意味で誰も妨げることはできません。でも、その救いを必要としているはずの私たちが、自分のプライドやその傲慢さのゆえに、主イエスを救い主と信じ、ともに歩むことを拒むなら、それは「すべての人を救う」という神様の御心を妨げることになるのです。つまり、私の救いに関して、自分自身が主のなされることを妨げる者となり得るのです。このことを聞いて、自分には関係ないと思う方もおられるでしょう。でも、私自身は、自分は関係ないとは言えません。

それは、私が進んで神様のなされることを妨げようとしている、という意味ではありません。ただ、みことばと聖霊をもって私を御子イエスに似た者に造り変えようと働きかけて下さっている主に、いつも協力的か、いつも進んでそれを願っているか？という、そうでない自分があることも思われるのです。それは時に、プライドであったり、傲慢さ、ただ自分が変えられるのが嫌だったり、面倒だと思ふことが原因かも知れません。いずれにしても、「主のなされること、聖霊の導きに対して100%、完全に自分を明け渡しています」ということのできない自分があるのを知っています。

でも、だからこそ、ここで神様をほめたたえた人々が言ったように、神様が私たちに与えて下さった「いのちに至る悔い改め」の重要性と必要性を見るのです。日々自分の悟りや正しさに頼るのではなく、主イエスにより頼むことの大切さ、もし自分中心なところに気付かされるなら、いつでも主の方に向きを変え、主こそ、こんな私のために十字架にかかり、その死をもって贖って下さった方、また三日目によみがえられ、聖霊を与えて下さることで、私に父なる神様に喜ばれる歩みをさせて下さる方であると信じ続ける必要を覚えるのです。

主は、ご自分を信じるすべての者に聖霊を与えて下さいます。それが主の御心だからです。聖霊は、みことばを通して私たちの古い姿、つまり、自己中心な姿に気づかせてくれることで、私たちの自我を砕かれます。そして、それは決して喜ばしいことではありません。でも、その中で、主イエスが十字架で死なれたこと、またよみがえられたことの意味を私たちにわからせて下さるのです。そのようにして私たちが自分ではなく、神様をほめたたえる者となり、その証を通して人々が主の福音を聞き、彼らもまた神様をほめたたえる者となるためです。主の前に自分の傲慢さ、頑なさを認め、そんな者を赦し、愛し、いのちで満たして下さる主に、感謝と賛美をささげようではありませんか。そして、進んで主に従おうではありませんか。